

韓国気象学会総会に出席して*

浅井 冨雄**

1989年4月28～29日ソウルで開催された韓国気象学会第27回総会および研究集会に出席した。韓国気象学会会長・金正禹延世大学教授からの招待状をいただいたのは3月のことであった。研究者個人としてのほか、日本気象学会理事長として出席するという側面があったため、常任理事の御意見をうかがった。数年前、中国気象学会とは太い絆で結ばれて以来、研究交流が活発に行われるようになり、大変喜ばしいことである。一方、最も近くの韓国気象学会とは、組織としてまだ交流のないことを私はかねがね残念に思っていたので、積極的に、この機会を日・韓の学術交流の活発化の端緒にしたいと思った。幸い常任理事の方々の賛同も得られた。

韓国気象学会総会とそれに続く研究集会は韓国高等科学技術研究院 (Korea Advanced Institute of Science and Technology, 略称 KAIST) で開催された。KAIST は1966年に設立された KIST と1971年設立の KAIS とが発展・合体して1981年新発足した立派な研究所である。物理学、化学、生物科学、応用数学、計算科学、その他工学全般にわたる韓国最高の一大研究センターであり、大学院教育にもあたっている。気象の研究者若干名が応用数学、計算機科学の研究部門に属して、主に大気数値モデリングに従事している。

韓国気象学会会員数は～350名、予算規模～1,000万円、年会費2,000円、学会誌(英語と韓国語)は毎年3

号発行、年2回の研究集会での発表数それぞれ～20篇であるから、韓国気象学会は日本のそれより規模が一桁小さい。しかし、総会・研究集会への参加者は100名を越え、境界層から高層大気にいたる広い分野をカバーし、とりわけ大学院生レベルの若い参加者が多く、討論は大変活発である。

現在の主なメンバー、とりわけ大学教官は殆ど米国学、そこで学位を取得した人達である。近年、PhDレベルの若い優秀な研究者が増えつつあり(日本帰りのも少々)、そのことが、一方では受け入れ体制、処遇について頭の痛い問題ともなっているが、長期的には今後の躍進に導く強いインパクトとなるであろう。大学も気象局(Korea Meteorological Service, ～860名)も目下拡充計画に懸命である。例えば、延世大の気象グループは現在教授・助教授4名で天文・気象教室に属しているが、将来6名に増やし気象学教室を独立させようとしている。気象局は radar network (現在の1点を4点にし、研究用可搬型ドップラーレーダーも導入)の整備を始めとして、～200名増員を伴う改組拡充計画(ServiceをAdministrationへ格上げ?)を推進しつつある。気象学会も社団法人として基盤強化をはかり、国際交流の活発化にも真剣に取り組んでいる。韓国はいま社会的にも幾多の難問をかかえているが、同時に発展へ向けての秘められた活力とでもいいうべき、若々しい息吹きを感じた。

最近、日本への留学生も増加しつつあり、隣国である韓国との学術交流を強めることは我々の責務であろう。本年秋季大会(1989年11月、那覇)に韓国気象学会会長金正禹教授を招待することにしたい。

* A report of the 27th Annual General Assembly and Scientific Meeting of the Korean Meteorological Society, Seoul, April 1989.

** T. Asai, 東京大学海洋研究所.